

第10部会

要素をカトリック教会の正式な宗教儀礼である典礼に採用することが認可されたことはすでに述べた。さらに、教皇庁は、一九六九年、インドのカトリック教会に対して『十二ヶ条の声明』を示し、典礼の中にインド固有の文化要素と儀礼要素を採用することを公認している。教皇庁の声明は、宣教地において必然的に付随する多様性や相違をインドの特殊事情にも照らして重ねて保証したことになる。

インドのカトリック教会は、ドミナントな土着文化に歩み寄り、それを典礼や組織の構造の中に採り入れ、ヒンドゥー文化に辿り得る諸要素を反映した独自の典礼を模索してきた。しかし、典礼の中に見られるインド的諸要素は、ヒンドゥー教の宗教的・儀礼的文脈から切り離され、キリスト教の儀礼の式次第に則って再編されている。つまり、ヒンドゥーの儀礼要素は、脱ヒンドゥー化というプロセスを経た後に、キリスト教的な意味づけを付与されて典礼の中に組み込まれているのである。

ビシュワスという信じ方

——ネパールのキリスト教における信念——

丹羽 充

二〇〇六年まで世界唯一のヒンドゥ王国であったネパールには、現在キリスト教（主にプロテスタント諸派）が急速に浸透している。人口に占めるキリスト教徒の割合は二〇〇八年時点

で、実に四%から八%にまで上るといふ見解すらある。しかしながら、だからといってネパールにおいてキリスト教が市民権を獲得し得ているというわけでもない。一九六〇年代から行われたキリスト教徒に対する法的抑圧が終焉した現在でも、キリスト教徒に対する社会的抑圧は依然として根強く続いているのである。

ネパールのキリスト教についてはこれまで、実証的な学術研究はほとんどなされていないものの、宣教師の報告やそれを基にした文献研究が少なからず蓄積されてきた。その中でキリスト教に対する社会的抑圧、ことさら親族関係による抑圧は非常に頻繁に指摘される事柄である。特に宣教師の報告では、ネパールのキリスト教徒をエンパワーするような、すなわち親族集団による抑圧に耐えるキリスト教徒を賞揚するような護経論的なものが大変多く書かれてきた。

だが、それにもかかわらず、実際にキリスト教に対して親族関係によるどのような抑圧があるのか、その背後にどのような論理があるのかという点についての説明は殆どなされていない。そこで本発表では、親族関係がキリスト教の展開に対してどのような影響を与えているのか、またそれがどのような論理に裏打ちされているのかという点を明らかにしていく。その上で、親族関係による複雑な規制の中で、キリスト教徒であること、さらにキリスト教徒として「信じる」ということが、ネパールの人々にとってどのようなことなのかということに焦点を当てていく。

事例としては、カトマンドゥ盆地ラリトプール地区の離村、

ドゥクチャップ村を取り上げる。ドゥクチャップ村に対するキリスト教の伝道活動は三年前にようやく本格化したばかりであり、キリスト教は更なる信徒獲得のさなかにある。こうした状況においては、キリスト教を巡る人々の葛藤や対立が顕在化しやすいことから、ドゥクチャップ村は格好の研究事例であるといえるだろう。

具体的には二〇〇九年七月に行われたドゥクチャップ村での調査のデータを基に、右記の課題にアプローチしていく。作業の内容は、キリスト教信者の家系図の精査、そこに見出される特徴についての聞き取りを交えた分析、および親族関係に起因する対立や葛藤の分析である。

異文化にはわれわれとは異なった「宗教」や「信じる」ということのあり方があるということは、これまで広く指摘されてきた。だが、そうした指摘は往々にして「宗教」や「信じる」ということに多様なあり方が存在することを指摘するのみに終始し、具体的に人々にとって「宗教」や「信じる」といったことがどういうことなのか、われわれ側の概念とどのように異なっているのかという問いを放置する傾向がある。本研究は現地の人々の具体的な実践や語りに着目することで、このようなより大きな問題に対しても貴重な研究事例を提供することができるとであろう。

転換期仏教寺院における活動

——イメージ戦略と感情労働の間——

高橋 嘉代

現代のわが国の既成仏教を語るに際し「葬式仏教」としての側面、そしてこの側面からみた「仏教の形骸化、寺と人々との関係の希薄化」は、わが国の既成仏教の問題状況として繰り返して言及されてきた。この言説が繰り返される背景を分析するにあたり、本報告では寺院や僧侶に対する役割期待と、その反映として現われる寺院側の活動の性質に注目したい。

新規入檀の際には、墓地や寺院の立地条件や墓地の借用条件と共に、住職や寺族の「人柄も見て」入檀を決めるという傾向が指摘される。一方、何世代にもわたって寺檀関係を継続してきた檀家たちは、自身の檀那寺およびその住職に対しては「自分たち」が支えてきた「自分たち」の先祖の祀り場・その管理責任者という意識が概して強い。したがって同一寺院の檀家中でも、自身の檀那寺やその僧侶たちに対して異なった役割期待があることが伺える。

僧侶の側に目を転じてみよう。檀那寺の僧侶として携わる葬送の現場は、彼等彼女等にとって高度な感情労働の現場でもある。聖職者としてより相應しい振る舞いという役割期待を前提とし、葬送の現場における僧侶たちは人の死をめぐる感情管理に務め、自らのものとして自発的にあらわれる感情と、立場上・職業上相應しいとされる感情表現との調整をはかる。さら